



湖水の女

鈴木三重吉

昔ウエイルスといふところの或山の上に、寂しい湖水がありました。その近くの或村に、ギンといふ若ものが、母親と二人で暮してをりました。或日ギンは、湖水のそばへ牛をつれて行つて、草を食べさせて居りますと、おきそばの水の中に、知らない若い女の一人、ふうはりと立つて、金の櫛で徐かに髪を梳いて居りました。下にはその顔が、鏡にうつしたやうに、くつきりと水にうつつて居り

ました。それを見ると、その女の人は、それは〜何ともいひやうのない、やさしい美しいかでした。ギンはしばらくちつと立つて見て居りました。そのうちに、何だか、自分の持つてゐる、大麥でこしらへた麵麩と乾酪を、その女の手にやりたくなりました。そして、そつと、岸へ下りて行きました。女は間もなく、髪を梳いてしまつて、すら〜とこちらへ歩いて來ました。ギンは蹶つて麵麩と乾酪をさし出しました。

女はそれを見ると首をふつて、「かさ〜の麵麩を持つた人よ。私は滅多に埋りはしませんよ。」

それでギンは、その怒る目には、麵麩の捏ねたばかりで焼かないまゝのを持つて、まだ日も出ない先に、急いで湖水へ出て行きました。

かう言つて、いきなり、すらりと水の下へもぐつてしまひました。

そのうちに日が山から出て、だん〜に空へ上つて行きました。

ギンはせつかくひきだと思つた女の、それなり隠れてしまつたのですから、急に悲しくなりまして、牛をつれてしほ〜と家へ歸りました。そして、母親にそのことをすつかり話しました。

母親は女の言つた言葉をいろ〜に考へて、

「やつぱり、かさ〜の麵麩は厭だと言ふのであらう。だから今度は焼かない麵麩を持つてお出でよ。」と教へました。



て家へ〜らうと思ひました。

すると丁度そこへ、夕日を受けた水の下から、女の人がやつと出て來ました。そして昨日よりも、も

つとうつくしい人になつてをりました。ギンは嬉しさのあまりに口がきけなくて、たゞ黙つて麵麩粉の捏ねたのをさし出しました。

湖水の女はやつぱりかぶりを振つて、「濕つた麵麩を持つた人よ。」

私はあなたのところへ行きたくはありません。」

かう言つて、やさしく微笑んだかと思ふと、またそれなり水の下へ隠れてしまひました。ギンは仕方なしにとぼ／＼家へ歸りました。

母親はその話を聞いて、

「それは固い麵麩も柔らかい麵麩も厭だといふのだから、今度は半焼にしたのを持って行つて貰よ。」と言ひました。

その晩ギンはちつとも寐ないで、夜が明けるのを待つてをりました。そしてやつとのこと空が明るくなると、急いで湖水へ出て行きました。

さうすると、間もなく雨が降つて來ました。ギンはびつしよりになつたまゝ、また夕方までちつと立

やうやく口をきいて、

「私はあなたが大好きです。どうか私のお嫁さんになつて下さい。」と頼みました。

併し女は容易に聞き入れてくれませんでした。ギンはいろいろ言葉をつくして、いくども／＼頼みま



した。

すると

女はし

まひに

やつと

承知し

て、

「それ

ではあ

なたのお嫁さんになりませう。ですけれど、これから先、私が何の悪いこともしないのにお摸ちになると、三べん目には、私はすぐに湖水へ歸つてしまひますがよろこびますか。」と念を押しました。ギン

つて居りました。

けれども女は一寸も出て來ませんでした。しまひにはだん／＼と湖水も暗くなつて來ました。ギンはそれは／＼がつかりして、もう家へ歸らうと思ひました。

すると、不意に、一と群の牛が湖水の中から浮き上つて、のこ／＼とこちらへ向けて歩いて來ました。

ギンはそれを見て、ひよつとすると、あの牛の後から湖水の女が出て來るのではないかと思ひまして、ちつと見てをりますと、ちやんとそのとほりに、間もなく女も出て來ました。その上に、昨日よりもまたもつと美しい女になつて居りました。ギンは何とも言ひやうのない程嬉しくて、いきなり、さぶりと水の中へ飛び下りて迎ひに行きました。

女は今日はギンがさし出した麵麩を徹々みなながら受け取つて、ギンと一しよに岸へ上りました。ギンはそのときに、女の右足の靴の紐の結びかたがすこし違つてゐるのがちらと目につきました。ギンは、

は、

「そんな亂暴なことは決してしません。あなたを撲つくらゐなら、それより先に私の手を切り取つてしまひます。」

かう言つて堅く誓ひをしました。

さうすると、どうしたわけか、女はふいに、黙つて水の中へ下りて行つて、牛と一しよに、ひよいと姿を隠してしまひました。ギンはびつくりして、自分もいきなり後を追つて飛び込もうとしました。すると、後から、

「これ／＼お待ちなさい。そんなにさわがなくてもいい。こつちへお出でなさい。」と、だれだか大聲で呼び留めるものがありました。

振り向いて見ますと、少しはなれたところに、眞白な髪をした、品のいゝお爺さんが、二人の若い女の人をつれて立つて居りました。ギンはこは／＼側へ行きました。よく見ると、その女の一人は、たつた今水の中へ消えたばかりの湖水の女でした。それ

からもう一人の女を見ますと、不思議なことには、それもさつき自分のお嫁さんになると言つた、同じ湖水の女でした。ギンは自分の目がどうかかつてゐるのではないかと思ひました。

お爺さんは、

「これは二人とも私の娘だが、お前さんはこの二人のどちらが好きなのか、それをちやんと違ひなく教へておくれ。さうすれば、切み通りにお嫁に上げませう。」と、やさしく言つてくれました。ギンは一人に二人を見くらべましたが、二人とも顔も背も、着物も飾りも、そつくり同じで、ちつとも見わけが付きません。もし間違へたらそれきりだと思ひますとギンは気が氣ではありませんでした。けれどもいつまで見較べてゐても判断がつかないので、どうしたらいいかと困つて居りますと、一人の方が、片足をかすがに前へ出しました。それも、目見えないくらゐほんの少ししかしたゞけてしたが、一生懸命になつてゐたギンには、その足の靴の紐が、さつき

ちらと見たやうに、ちがつた結びかたがしてあるのがちやんと目にとまりました。ギンは、やつとそれで見別がついたので、

「解りました。この人です。」と、勇んで前へ出て、その女を指しました。

お爺さんは、

「なるほどよく當つた。それではこの娘を上げるからお家へつれてお歸りなさい。私は、一と息で數へられるだけの、羊と牛と山羊と馬と豚を、娘にお祝ひにやりませう。併しお前さんが、これから先の、この娘を何の罪もないのに三べんお撲ちだと、すぐにこちらへ取りもどしてしまひますよ。」と言ひました。ギンはこの上もなく喜んで、

「決してそんなことはないしません。この人を撲つくらゐなら、利の手の方を先に切つてしまひます。」と、改めてお爺さんにも誓ひました。お爺さんはそれを聞くと安心して、娘に向つて、微笑みながら、お前の欲しいと思ふだけの羊の數を、一と息で言つ

て御覽なさいと言ひました。娘はすぐに、

「一、二、三、四、五。」と、一、二、三、四、五、一、二、三、四、五。」と、一度の息がつかく限り、五つづ

お爺さんは、今度は牛の數を、一と息で言ひなさいと言ひました。娘がまた同じやうに、

「一、二、三、四、五。」と、一、二、三、四、五、一、二、三、四、五。」と息がつかくまで數へますと、その數だけの牛が、また一度に湖水の中から出て來ました。



つ數をよみました。すると、それだけの羊が、すぐに水の下から出て來ました。

同じやうにして、その次には、山羊、山羊の次ぎには馬、それから豚といふ風に、すつかり揃ひました。そして牛は牛、山羊は山羊で順々に並びました。それと一しよに、お爺さんともう一人の娘は、いつの間にかふいに姿を隠してしまひました。

湖水の女とギンとは、この上もなく仲のよい夫婦になつて、二人で家を持つて、それはく楽しく暮しました。

二

湖水の女はネルファークといふ名前でした。二人

の間には可愛らしい男の子が三人生まれました。

そのうちに一番上の子供が七つになりました。すると、或とき、知合の家に御婚儀がありました。ギンも夫婦でよばれて行きました。

二人は自分たちの馬が草を食べてゐる野原を通つて、その家へ出かけて行きました。さうすると、ネルファークは、途中で、あんまり遠いから、私はよして家へ歸りたいと言ひました。

ギンは、

「だつて今日ばかりは、どうしても二人で行かなければいけない。もし歩くのが厭ならば、お前だけは馬で行けばいい。あすこにゐる馬をどれか一匹捕へてお置き。私はその間に家へ行つて、手綱と鞍を持つて来るから。」と言ひました。ネルファークは、

「ようございませす。それではちやんと捕へておきますから、序でにテイブルの上においてある私の手袋を持つて来て下さい。」と言ひました。

ギンは急いで引き返して、馬と手綱と、ネルファ

は愕いて、そつとネルファークの肩を叩いて、どうしたのかと聞きました。

「だつてあの罪のない赤ん坊は、あんなに體がひよわいんですもの。あれでは折角生れて來ても一寸もこの世の歡びといふものを受けることは出來ません



見て居て御覽なさい。きつと病氣で苦しみ通して、亡くなつてしまひますから。ですが、あなたはこの二度私をお撲ちになりましたよ。」

かう言はれて、ギンは、しまつたことをしたと思ひました。

クの手袋とを持つて出て來ますと、ネルファークは、そのまゝちつとそこに立つたさうでゐました。ギンは、

「お前何をぼんやりしてゐるの。早く馬を捕へてお出でよ。」と、持つて來た手袋の先で冗談に一すいと肩を叩きました。

「まあ、あなたはこれで一つ私をお撲ちになりました。私が何の悪いこともしないのに。」

ネルファークは溜め息をつきながらかう言ひました。ギンはネルファークを貰つたときに約束したことを、すつかり忘れて居りました。

ネルファークは間もなく馬に乗つて、二人で向うの家へ行きました。

それから幾年もたつてから、二人は或とき、今度は、或家の名附けの祝ひによばれて行きました。

人々はそれ／＼席について、みんな愉快地盞を上げました。するとネルファークは不意に涙を流して、一人て悲しさをすゝり泣きをしました。ギン

もうあと一度になりました。もう一度うつかり撲ちでもしたら、ネルファークはもうそれきり水の中へ歸つてしまふのです。ギンはネルファークを心から好いて居るのですし、三人の子供たちに取つても大事なお母さまなのですから、ネルファークに行かされてしまふと、それを大變でした。

ギンはそれから毎日氣をつけて、そんなことにならないやうに、一生けんめいに要領して居りました。ネルファークに行つてしまはれるといふことは考へた／＼でも胸が裂るやうな氣がしました。

それから間もなく、ギン夫婦が名附けの祝ひによばれて行つた赤ん坊が、やつぱりネルファークが言つたとほりに、ひどい病氣をして、とう／＼死んでしまひました。

ギン夫婦はそのお葬ひに行きました。さうすると、ネルファークは、みんなが泣き悲しんでゐる眞ん前で、一人うれしさうにこゝと笑ひ出しました。

みんなは、あつけに取られて、ネルファークの顔を

見ました。ギンも愕りして、あわて、ネルファークの肩に手をかけて、

「あゝ、ネルファーク、何といふことだ。静かにおしなさいよ。」と言ひました。ギンはみんなの人にきまりが悪くて、ほんとうに顔から火が出るやうな気がしました。

「だつて嬉しいぢやありませんか。赤ん坊はこれですつかりこの世の苦しみをのがれて、神さまのおそばへ行くのですもの。」

ネルファークはかう答へて、

「併しあなたはこれとどう、私を三べんお撲ちになりましたね。ではさやうなら。」と言つたなり、さつさとそこを出て行つてしまひました。

ネルファークはそれから急いで家へ歸つて、湖水から出て来た羊と牛と山羊と馬と豚とを、一々呼び集めました。

「灰色の斑點の牝牛よ、
大きなぶちの牝牛よ、

「あゝ、その白の灰色の牝牛よ、

お前もお家へ歸るのだよ。」

と、その牛も呼びました。それから羊も山羊も馬も豚も、すつかり集つて来ました。そしてみんなて列を作つて、ネルファークのあとに附いて、どん／＼湖水の中へ歸つてしまひました。

ギンは氣狂ひのやうになつて、あとを追つかけて行きましたが、もう女の姿も牛や羊や馬の影も見えませんでした。ひろ／＼とした寂しい湖水の上には、たゞ、四匹の牡牛が引いて行つた鋤のあとが、一とすぢ残つてゐるばかりでした。ギンは悲しさの餘りに、そのまゝその湖水の中へ飛び込んでしまひました。

残された三人の子供は、戀しいお母さまを尋ねて、毎日泣き／＼湖水のふちを彷徨ひくらしてとりました。するとネルファークは或日水の中から出て来て、三人を慰めました。そして、

小さなぶちの牝牛よ、
白い斑點の牝牛よ、

みんなこゝへお出でなさい。

芝生にゐる、

その四匹もお出でなさい。

それから灰色のお前も、

王さまのところから来た、

白い牝牛も、

釣にかゝつてゐる、

その小さい黒い小牛も、早くお出で。

さあ／＼みんなて歸りませう。」

かう言つて呼びますと、そちこちで草を食べてゐた牛は、すぐに大急ぎでネルファークの側へ集つて来ました。小さな黒い小牛は、殺されて釣に引つかけられてゐたのでしたが、それもちゃんと活きかへつてかけ出して来ました。四匹の牡牛は丁度品をすいて居りました。

ネルファークは、

「お前たちは、これから大きくつて、世の中の私たちの、病氣を直す人にならなさい。それにはお母さまが、ちゃんといふことを教へておいてあげるから、こちらへ入らつしやい。」

かう言つて、三人を、或こんもりした谷間へつれて行つて、そこに生えてゐる、薬になる草や木を一教へておいて、再び湖水へ歸つてしまひました。

三人はそのお蔭で、ウエイルス中の一番えらいお醫者になりました。殿さまから位と土地と、人を療治するお許しを貰つて、ミットファイトといふところへ移りました。そして澤山の人の病氣を直してやりました。

「ミットファイトの三人のお醫者」といへば、後の世までもウエイルス中でだれ一人知らないものはありませんでした。

牛がつけて行つた鋤のあとは、今でもその湖水の面にあり／＼と残つてゐます。ネルファークが薬を教へた谷は、今に「お醫者の谷」と呼び傳へて居ます。